



私が幼児教育を志した頃(4)

津守 真

人が青年期に、未開拓で未知の自らの将来に向かって、何を願ひ、何を志すようになるかは、そのときの歴史、社会の状況に規定されることは大きい。前に記したように、世界史の規模で起こった日本の敗戦の体験は私にとっては強烈である。しかし、それは話の半分で、他の半分は自分の中に幼少期から醸成され生涯にわたって成し遂げたいと願う個人的な願望で、それは青年期に至って明瞭になり、具体的な出会いとなって人生に用意されている。私の場合には子どもの仕事であった。言うまでもなくこの両者は互いに入り組んでいる。



西本願寺戦災浮浪児

戦後間もなく、空襲で親を失った戦災孤児が東京の町には大勢いた。昭和二十年暮れから二十一年初め頃、心理学科の学生は、築地西本願寺の浮浪児調査に動員された。焼けて曲がった鉄骨の中で寝そべっている子どもたちと面接するのだが、あまり答えてくれなかったし、私は毎日ただその中を歩き回って感想を書いて提出した。家に帰ると髪の毛から下着までシラミが糸を引いていて、当時できたばかりのDDTを一面にふりかけた。いまでは想像もむつかしいが、当時の東京はどこにいても浮浪児がいた。私はこの子どもたちとそれ以上かかわることにはならなかったが、子どもの仕事をするようになったひとつの動機ではなかったかと思っている。

今井館日曜学校—子どもに「おはなし」をする

同じ頃だったと思うが、先輩の山榑雅信さんから、今井館日曜学校を手伝わないかと私はお誘いを受けた。今井館は内村鑑三の聖書講堂で、内村の愛弟子であり横浜港の水先案内だった山榑儀一氏がお嬢さんの死を悼み、記念にそこで日曜学校をはじめられた。昭和十年頃である。当時一高生だった山榑雅信さんの「おはなし」が面白く小学生だった私はそこに通っていた。

戦争が終わり、昭和二十一年は、東京の町には子どもたちが溢れていた。私共は日曜日の午後になると、近所の神社の境内にいつて紙芝居をした。その中には今



井よねの聖書物語十数巻が含まれていた。テレビもない素朴な時代だったから、たちまち大勢の子どもたちが集まって来た。「このつづきを見たい人はこーい」と言うと、皆ぞろぞろと今井館までついて来た。よちよち歩きの弟や妹も一緒に来た。こうして三十人も五十人も幼児から中学生の子どもたちに毎週「おはなし」をすることになった。「おはなし」は面白くなければ子どもはすぐ立ち去ってしまう。面白いというのはおもしろおかしいとか、子どもを笑わせることではないということ、やってみるとすぐに分かる。子どもものに響き、訴えるものがなければならぬ。それは大人の心に響き訴えるものと共通である。勿論、子どもに分かる言葉で話さなければいけないし、抽象的な語ではなくて、子どもが身近に触れ、容易に想像できる言葉でないと聞いてもらえない。「お日様がぼかぼかと暖かく、猫ちゃんが屋根の上でひなたぼっこしていました。」とか「三つの子のお兄ちゃんと一緒に、とことこ、野原を歩いて行くと、黄色いお花が咲いていました。お花を摘もうかどうしようかと迷いながら……」というような身辺ばなしを入れて、子どもたちの顔を見て話していると、子どもたちと呼吸が合ってくる。「おはなし」で重要なのは、私は何を子どもに語りたかというポイントが自分にはつきりしていることである。むつかしい理屈ではない。私自身が心のどこかで小さな感銘を受け、これを子どもに伝えたいと思うことがなければ「おはなし」にならない。この「おはなし」は後に私自身の子どものとふれあい（遊びや保育）にとつての原点にあるので、もう少し解説したい。今井館日



曜学校で話すのだから聖書の話が主になる。聖書には子どもの好きな話がたくさんある。

たとえば羊飼いの少年ダビデの物語である。予言者サムエルがベツレヘムの町の有力者エッサイの息子たちの中から王にふさわしい人を選ぶ場面がある。長子のエリアブは背も高くハンサムな軍人である。サムエルはこの人こそ王にふさわしい人だと思う。すると主（神）が言われる。「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔形を見、主は心を見る。」（サムエル記上十六章七節）。こういう部分は聖書のことばそのまま子どもに通用する。子ども用に言い直す必要はない。自分で暗記するほど何度も読んで考えておけばよい。こうして七人の兄たちが次々にサムエルの前を通るが、いずれもこの人ではないとサムエルは言う。このあたりは子どもたちの顔を見ながら話すと、子どもも口をはさみ、大人も一緒に意図を言える部分である。そして最後に「あなたの息子たちは皆ここにいますか」とサムエルが問い、「まだ末の子が残っています。羊を飼っています」とエッサイとの問答があつて主人公のダビデが登場する。文語体聖書によればダビデは「色赤く目美しくしてその貌（かたち）麗（うつくし）と記され、新共同訳だと「血色がよく、目は美しく姿も立派であつた」となっている。色が赤く目が美しいとはどういうことだろうと問えば、子どもたちはすぐいろいろなことを言い始める。聖書の記述はきまこまかく、その中に人の生き方がち



りばめられている。こうしてダビデ王が敵の勇者ゴリアテと戦うときの祈り、サウル王からねたまれ、追われて逃げるときの王への忠誠の物語などひとつひとつ語ってゆくと何週間も何か月もかかってしまう。子どもたちは紙芝居も好きだが「おはなし」の方がもっと好きのように思えた。語り手も紙芝居では絵の裏に書かれている文字や絵にとらわれがちである。「おはなし」ではその場で子どもと大人との間にクリエイティブな空間が生み出される。子どもは溜め息をつき、「それからどうしたの?」と尋ねる。私はこの「おはなし」を通して子どもと付き合うコツを知ったように思う。小さい幼児のために、床には積み木も用意してあった。

大学生の期間を通して、私の生活は毎週日曜日の子どもたちと過ごす時間を中心に回転していた。昭和二十一年三月から、その同じ場所で矢内原忠雄先生の聖書講義がはじまった。これは私の魂の糧で、休まずに出席した。先生の講義が昼に終わると、玄関の扉の前に子どもたちが押しかけていて、扉が軋んで音を立てていた。扉を開くと腕白な男の子たちが飛び込んで来て、先生がまだ講壇におられるときから、壇の上走り上がった。私は必死になって止めるのだが子どもたちの方が早かった。いつも私は冷や汗を流していた。聴衆のなかには躰が足りないと思った人もいたかもしれないが、矢内原先生はこういう子どもたちを叱られたことは一度もなかった。腕白な男の子たちの傍にはいつも小さな幼児たちがうろうろしていたからかもしれない。先生



は講義のときに私語する人には鋭い目を向けられ、ときには講義を中断して注意されることもあった。けれどもその厳しさの中に、柔和な優しい目があり、そのことは聖書講義の中にも滲み出ていた。私が子どもたちにダビデのおはなしをしていた頃、先生の聖書講義は同じ箇所、サムエル記だった。ダビデ王の晩年、息子のアブサロムが反逆し、ダビデ王はエルサレムの城を出て、ケデロンの谷をオリブ山へと逃げる。

「ダビデはオリブ山の坂道を登ったが、登るときに泣き、その頭をおおい、はだしで行った。」と聖書には記される。ここを講じながら、先生も泣いておられるように思えた。先生は語られた。「人生に於いて、泣きつつ坂を上る経験は真に痛ましい。

……日が暮れて既に暗くなつた後、私は疲れ切つた身体に悲しめる心を包んで、陸坂を登つて来た。坂の中ほどの十字路まで来て息が切れ、そこで立ち止まって星を仰ぐ。……幾度も立ち止まりながら泣きつつ登つた。その涙が私を神に親しませた。」

(矢内原忠雄全集第十卷五九三頁)。へ矢内原忠雄は昭和十二年に「国家の思想」という論文が戦時に平和論を説いたというので軍部ににらまれ、社会問題となり、東大を辞職された。そのときの心境がここに反映されている。)

結局息子アブサロムは森の中で木の枝に引つ掛かり悲惨な死を遂げる。ダビデは息子の死を悲しみ、「わが子アブサロムよ、わが子、わが子アブサロムよ。ああ私が代わって死ねばよかつたのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」と詩をつくる。このアブサロムの反乱には、ダビデ自身にも原因があった。ダビデの涙は自分の過去に対



する反省をもこめたものであった。羊飼いの少年時代から王になるまでの物語を学んで来た者は人間の一生を考えざるをえない、だれにも共通の物語である。子どもにその通り話すのではないが、大人として両者に共通の人間の真実を考えておくことが「おはなし」を前向きに面白いものにする。この長い「おはなし」を終えたときには、子どもたちの間にも静かなひとときがあったことを私はいまも覚えている。あのと子どもも人間の一生をイメージしていたのだと思う。

「おはなし」が終わると、山榊さんの姉妹がおやつを用意してくださる。それから子どもたちは分団に分かれて絵をかいたり、切り紙をしたり、道路でドッジボールをして、夕闇の中でボールが見えなくなるまで遊んだ。私は二、三歳の小さい子どもとよく玄關前の石段に腰をおろして座っていた。「おはなし」の後には黙っていても子どもが子どもと触れ合う感覚を知った原体験である。後に、当時の幼稚園の一斉指導で子どもが満ち足りた生活をしているのだからかと疑問をもったのも、このような原体験に照らしていたのだと思う。